

〈論文〉

## 書き手の伝達意図に関する文体学的考察 ——中国語母語の日本語学習者への指導という立場から——

劉 金 拳・王 宗 傑

### はじめに

日本語を勉強する中国語母語話者は、中国語のネイティブスピーカーならではの漢字知識・中国文化への理解をもとにすることができるゆえ、初級段階では上達しやすい。とりわけ、論文作成時、漢語名詞・漢語動詞を生かすこともできれば、作品読解時、それらの語彙が醸し出した醍醐味も身に滲みるまでという感じで理解できる。反面、漢語副詞のニュアンスは真に理解できなかったり、語尾や文末辞の変化による「敬体」・「常体」と時制の「現在形」・「過去形」<sup>1)</sup>、及びその複雑な使い分け、という中国語にないものに影響され、作成したものが読み手に文体的な違和感を与えたり、作品への深入りした読み取りができなかったりすることもある。

本稿は、文体学の理論に基づき、日本語を勉強する中国語母語話者への指導という立場から、下記に見ていくテキストの「文体素」<sup>2)</sup>としての漢語語彙の使用、「敬体」・「常体」、「現在形」・「過去形」の使い分けを例にし、作者が文体をもって伝達しようとする意図を、いかにして理解し、深い読解ができるかを検討するものである。

### I 書き手の伝達意図の理解における文体学理論の応用

文体の訳語としてのスタイルという言葉は、そもそも古代人が蠟引き板や土板に文字を書写するために用いた尖筆<sup>スタイラス</sup>・鉄筆<sup>スタイラス</sup>を語源としたものである。今日に至って、書字空間に筆

- 1) 「敬体」は「丁寧体」、「デス・マス」体、「です・ます」体とも、「常体」は「普通体」、「だ・である」体、「ダ・デアル」体とも表記される。それから、「現在形」は「ル形」、「過去形」は「タ形」とも記される。本稿では、「敬体・常体」、「現在形・過去形」というが、先行研究の引用やまとめをするとき、原文の表記に従う。
- 2) 小池〔2005〕が指摘したテキストの「文体素」は、野村〔1996〕が言っている「表層の要因」にあたる。

遣い=文字を書き付ける身体の軌跡を認識の基盤にしたこの概念は、小池（[2005]）が纏めているように、「メッセージの効率的伝達を考えて採用される、視覚的文体素（文字・表記）」と意味的文体素（用語・表現）とによる言語作品の装い、または、装い方」（西村 [2017], p.19）という広義的なものに発展してきた。それを踏まえた文体学的アプローチは、「文学作品を、テキストの言語的細部から出発して、一つの構造体として全体的に把握して解明」（篠沢 [1998], p.pi）し、深く理解するための有効な鑑賞方法とされている。

ただし、文体知識をもって作品への理解を深めることには、捉えにくい点が三つある。

### 1.1 「文体」という概念の曖昧さ

「文体」という概念について、今日に至っても統一した見解がないと言われている。数えきれない先行研究（岡部 [1969]、佐藤 [1966]、野村 [2005]、小林 [1975]、小林 [1976]）を総括すれば、文芸全体は、①叙事、②抒情、③自照、④劇という四種のものに分けられるが、異なった基準により、様々な文体に分類される、ということが分かる。

細分すると、作家の角度（個人の文体・超個人の文体——個人に現れながらも個人を超える、国・時代・流派の文体）、韻律の角度（韻文<詩歌・歌謡>・散文<小説・随筆・劇曲・評論>）、作者の記述態度（主観的文体<叙情文体・感想文体・書簡文体・日記文体・随筆文体>・客観的文体<記事文体・叙事文体・説明文体・議論文体・評論文体>）、時代の角度（古典・近代など）、それから、事務的文体（外交文書・商業通信文・法律文書・裁判記録文書・官庁命令・議会の決議）、国別文体など、多様なものになる。そういうことで、「文体」と聞いても、どの角度からのアプローチか即座に判断がつかないほど、「文体」という概念そのものさえ曖昧なものである。

### 1.2 学問の分野名としての曖昧さ

「日本文体論学会は、日本をはじめ世界の言語・文学について、広く文体に関する研究を推進し、研究者相互の連絡をはかることを目的とした学会です。現在、日本語、ドイツ語、フランス語、英語、中国語、スペイン語、ロシア語など、様々な分野の言語・文学を専攻する研究者が参加し、研究大会の開催と、学会誌『文体論研究』の発行を中心に活動しています。」（日本文体論学会 web）という会についての案内や、倉林秀男『言語学から文学作品を見る—ヘミングウェイの文体に迫る—』（開拓社 2018）の発売にあたって、「文体論とは文学テキストを徹底的に言語学的に分析し、作品内での表現の効果や作家個人の文章構成原理を解明する学問である。そして、文体論は言語学と文学研究の架け橋となり、言語学の射程を広げ、文学の読みを拓く可能性を持っている。」（開拓社 web）と

いう本の内容についての開拓社の宣伝などのように、「文体論」という言い方もあれば、「言語学の一分野である文体論とは、発想においても研究対象についても、全く別のものである。」(篠沢 [1998], p.10)とし、「文体論」とは一線を引いて「文体学」と名付けた言い方もあるし、「語言文体学」と「文学文体学」と別々に名付けたやり方もある。(魏 [2002])

本稿においては、「文体学」という言い方をとるが、混乱を避けるために、先行研究の引用やまとめの場合、その言い方に従う。

### 1.3 研究理論とストラテジーの不明確

「文体」という概念や「文体学」という定義の曖昧さが故に、この「分野が、文学なのか語学なのかはっきりとしない fussy なスタンスを守っており、さらに、独自の理論をほとんど持っていない(中略)作家のとらえどころのない『文体』を探る上で、さまざまな側面にメスを入れようとしてきたこの分野では、分析の際に応用する理論も当然多岐にわたる」(上田 [2006], p.27)との指摘通り、文体学をもって作品を鑑賞する場合、様々なアプローチができる。

歴史的観点から見れば、文体学の理論は、K. フォスラーや L. シュピツァーを創始者とした原因論としての観念論的文体論と、S. バイイが築いた目的論としての実証主義的文体論とに大別できる。

観念論的文体論は、「その対象を作者の技術や技巧ではなく、作者固有の独自性をもつコトバの創作過程そのものを考察しようとするもので」(能登 [2012], p.36)、詳しく言えば、「観念論的文体論は表現の性質を決定するものはその作者と作品の題材であるとみなす(中略)その根底にあるのは、作者の性質、気質あるいは教養、社会的階級、世界観がおのずとある表現形態を選び出すのだという考え方である」(能登 [2012], p.34)。まさに「文は人なり」というふうに、書き手個人のそのままの個性を追究するもので、文章心理学の角度から展開されるものが多い。

それに対して、実証主義的文体論は、「言語形式をいわば美的観点から分析しようとする態度」が基本的姿勢で、「作品の目的はその媒体である言語記号を外へ、つまり受容者たる読者へと差し向けることであるとの立場を取る(中略)作者の技術が作品を目指す目的とそれに適応した表現形態の選択について筋道をたてて深く考えてゆくものだという立場をとる。」(能登 [2012], p.36)

今日に至って、文体学の理論には、テキストの起源や作者の立場に立つもの・その目標に立つもの・言語手段そのものに観点を置くものがある。が、実際には、それぞれ対立することができない。なぜなら、ある特定の時代や社会を生きた人間が作成したものである

以上、文芸には必ず、その時代の課題や問題が形象されているはずだし、作者の伝達意図が込められているからである。ゆえに、

文体とは、話し主あるいは書き主の本性と意図によってきまってくる表現手段の選択から生じた、陳述の様相である。/(原文では改行、筆者注。以下同じ) これは、表現、表現の様相、話し主、話し主の本性、その意図まで、すっかり含めたひじょうに広い定義である。(ピエール・ギロー [1987], p. 125)

との指摘通り、書き手は、自分の本性を踏まえ、同義語や同義性のある表現、言い換えれば、同じ概念あるいは事柄・現象を表わす言語表現の中から、最も適した——意図された表現効果と読者に生みだされた効果との相違をなるべく少なくする、乃至は無くす——と認識した表現方法・表現様態を自ら選択し、「伝えようとする意味を変えずに、なお豊かな表現にするために感情を押し込めたり、美的要素を取り入れ」(能登 [2012], p. 38) たりして作成・創作にとりかかるのである。したがって、できたものは、「言語構造によって伝達される情報に、意味をねじ曲げることなく付加された強調(より豊かな表現にするためのもの、情意的なもの、もしくは美的なもの)である。」(リファートル [1978], p. 31)

「言語の意味は、主体の認知プロセスと密接に関わっており、表層レベルに言語化される表現形式のちがいが、外部世界にたいする主体の把握の仕方、問題の状況にたいする解釈のちがいを反映している」(山梨 [1995], p.6)。以下では、「文体素」を手掛かりにして、書き手の意図と、その意図伝達に「文体素」が果たした表現効果との比較を通し、テキストに対する評価の出所を分析してみようとする。<sup>3)</sup>

## II 語彙による作者の意図伝達

「テキストの何らかの要素に着目し、数量的に分析する方法(中略)文の長さ・品詞の比率・色彩語などの語彙の比率・和語漢語などの語彙の割合・文末表現の偏差・文字表記・句読点の打ち方・種々のレトリックの技法など」を取り上げれば、「主として古典の、執筆者の推定」や「時には作品の真贋を判定することができる」(野村 [1996], p. 83) のを筆頭に、テキストの表層の要因を手掛かりにしてその深層の意味を探求することは、多用かつ効果的方法の一つである。中でも、語彙の意識的使用は非常に重要である。

日本語の語彙は、品詞の角度から見れば、漢字や仮名表記で実質的な意味・概念的意味

を表す名詞・動詞・形容詞・形容動詞と、平仮名表記で文法的意味を表す連体詞・感動詞・助動詞・助詞・形式名詞などと、二つの部分からなっている。その巧みな使い分けは、作者の意図を伝達するのに大いに寄与する。

表記法と漢語名詞による伝達意図とその効果に関して、前に分析を試みたこと（劉・姚「2019」、劉・王「2019」）があるので、ここにおいて、漢語副詞による強い主観性の巧みな利用を例にして見よう。

文法的性格の強い品詞の適切な使用は、文章全体に統一したムードを醸し出し、作者の強調意図をよりの確に伝達できる。中では、「漢語副詞は主観性が強く感じられることが多く、事実とかけはなれた誇張、根拠や基準の曖昧な認識、思いこみに基づく判断といったニュアンスを感じさせることがあり、そのため」、「一般に書きことばのような硬い文体に適した性格を持っている漢詞とは反対に、くだけた話しことばに適した文体的性格を備えていることが多い」（石黒 [2004], p.12）。例えば、「多分～だろう」や「多分～と思う」という共起しやすい「組み合わせは、根拠のない推測、いわば表現者の憶測にたいしても使う」ゆえ、話し言葉としてよく使われる。それに対して、同じく表現者の憶測を表わす「おそらく～と思われる」や「おそらく～ないだろうか」と共起することが多い組み合わせは、「表現者の判断を前面に出さずに、断定を回避したことを示す表現である。そうした断定を回避するという姿勢に、書き言葉の文体にふさわしい慎重さがあるように思われる。」（石黒 [2004], p.10）

私はしゃべるにつれ濡れてくる相手の唇を見続けた。致命的な宣告を受けるのは私であるのに、なぜ彼がこれほど激昂しなければならないかは不明であるが、多分（下線強調は筆者注、以下同じ）、声を高めるとともに感情をつのらせる軍人の習性によるものであろう。（大岡昇平「野火」）

肺病にかかり、「世話になるばかりで何も返すことができない」者になった「私」は、分隊から五日分の食料が与えられ、病院に行かされたが、三日後病院に治癒と宣され、分隊に追い返される。「何の役にも立たねえ」この「私」の頬を、分隊長が殴り、「病院へ帰れ、入れてくんなかったら、幾日でも坐りこむだよ」と命令される。

この「激昂」は「多分、声を高めるとともに感情をつのらせる軍人の習性によるものであろう」、というのは、明らかに「私」の心理活動、言い換えれば内的独話である。書き手は、話し言葉的な「多分～であろう」という組み合わせを用い、さながら「直接話法」如き効果を収め、「私」と「分隊長」とを対照的に描写し、「分隊長」の「激昂」を静観する

「私」は、いかに悲惨な運命に陥ったのか、現実はいかに残酷であるか、と浮彫りにしている。

反面、漢語副詞の不適切な使用乃至は誤用により、文の構造のバランスが破壊され、おかしい文章になったこともある。よく挙げられる例として、中国語を母語とする日本語学習者の、漢語副詞の多用である。

中国語母語の日本語学習者の中には、書いたものは漢字表記でさえあれば高尚的イメージが漂うという誤解と、漢字への親近感とを抱いた人が多い。しかし、[案外]などのような書き言葉として避けることが望ましい「先入観」の強い漢語副詞・[絶対]をはじめとする「誇張のグループ」の漢語副詞・[多分]をはじめとする「総括のグループ」の漢語副詞を、「書きことばで用いると、厳密さに欠けるような印象を読者に与え、文体的な違和感を生じさせることがある」(石黒 [2004], p.12)。石黒が誤用例として挙げた、中国語母語話者の作文に現れた「しかし、憲法は一国の根本なので、多分修正する制限が相当に厳しい」という文がそれである。ここでは、「多分」を「おそらく～と思われる」に修正すべきである。

### Ⅲ 「常体」・「敬体」の使用

学制教育において、日本語を専攻する中国語母語の学習者は、大学一年のとき、会話文の形で「尊敬語」・「丁寧語」・「謙譲語」、「敬体」・「常体」の使い分けについて指導を受けるのが一般的である。そういうことで、「常体」・「敬体」によって表わされる、会話や会話文における話し手・聞き手の関係が理解できる。しかし、長年日本語を勉強した人でも、いろいろなことが原因で、その使い分けによって表わされる小説の地の文や論文における書き手・読み手の関係が理解できないのである。以下では、後者のみを見ようとする。

#### 3.1 「常体」・「敬体」の使い分け

一口に、「敬体」と呼ばれるのは、文末が「です」「ます」「～でしょう」「～ましょう」「～ません」「～ではありませんか」などであり、「常体」と呼ばれるのは、文末が「～だ」「～である」「～だろう」「～ではない」「～ではなからうか」などである。が、文章や小説の中には、「敬体」・「常体」の混在が多い。それは、主に書き手が想定した読み手や作中人物が訴えようとする対象、それから書き手の伝達意図によったものである。

##### 3.1.1 想定した読み手や訴えようとする対象

受け持ちの「仏教」という授業科目を受けた受講生が作成・提出したレポートの中にお

ける「敬体」・「常体」の混在に関する、高橋（〔2014〕）の考察<sup>4)</sup>を援用させていただく。この類のレポートは、「その内容が、事実を客観的に述べるだけでなく、感想を述べる部分をも含み、また目を通す教員に向けてのメッセージの記載も可能であるなど、学術的なレポートの典型とはやや性質が異なる」（p.488）。よって、「（講話として）聞いた話の説明やまとめの文には常体を用い、自分の思ったことや感じたこと・気持ちを述べる文、意見を伝える文には『です・ます体』を用いる」という認識のもとに、文体の使い分けを行っていることが分かる。」（p.487）という。その通りである。

みずず書房編集部の守田省吾氏は、途中で何度か気の弱くなった私を励まして本書を完成に導いてくださった。きっかけを造ってくださって本年四月退社された吉田さんへと合わせて厚く感謝します。（中井〔2010〕、336）

「くださった」部分は、不特定多数者に事実をコード化して紹介するに留まるが、「感謝します」部分は、「吉田さん」を読み手と想定し、感謝の意を丁寧に表示している。

主よ。長い長い間、私は数えきれないほど、あなたの顔を考えました。特にこの日本に来てから数十回、私はそうしたことでしょう。トモギの山に隠れているとき、海を小舟で渡ったとき（中略）この世で最も美しいもの、最も高貴なものとなって私の心に生きていました。それを、今、私はこの足で踏もうとする。（遠藤周作「沈黙」）

師のフェレイラが棄教したという報告を聞いたが、信じないロドリゴは、その実否を確かめるとともに、先輩の残した信仰の火種を絶やさないための捨て石になろうという情熱に燃えて日本に潜入し、隠れ信徒たちに布教の輪を広げるが、密告により逮捕された。宣教師の棄教こそ切支丹撲滅の最善策と信じた奉公所は、彼を転ばせるために、三人の信者を穴吊りにかけて彼を脅かす。自分が棄教したら三人が救い上げられるが、さもないと、逆さまに吊られた三人が鼻と口から血が絶えず流れ出て死んでしまう。最後に、棄教をもってキリストに倣い自分を犠牲にし、三人を救い上げようとしたロドリゴは、キリストが刻まれた踏み絵を踏むと決意する。ここにおいて、書き手は、ロドリゴがキリストへの讚美

4) この混在現象に関して、石黒圭（〔2004〕）は、自分の意見・感想・説明（例・問題提起を含む）は丁寧体、考察や事実を述べるまとめは普通体、が使われると考え、野田尚史（〔1998〕）は、中立調（特定の聞き手がない書き言葉に使われる）、ていねいさ非考慮で、中立形（非デスマス形）基調の文章・談話は、事実のみを述べる事実をベースに構成されているが、その中に「主張文」（事態に対する判断や説明を聞き手に主張する文）が含まれる場合、その文の文末がていねい形になりやすいとしている。ほかに、岡本能里子（〔1997〕）やバリ一・カヴァナ（〔2010〕）も取り扱っている。

と自分の篤い信仰を訴えるところを「敬体」で表現する反面、踏み絵を踏むという彼の決意を「常体」で活写し、読み手に伝えている。

### 3.1.2 使い分けによった書き手の訴え

熊谷（[1996]）が、『『女らしい文体』がどのように具現され、時代の流れによって、どう変化してきたのか、ということに注目して（中略）言語とジェンダーの関わり、ひいては、社会関係の反映としての言語についての示唆を探したい』（p.264）目的から、過去四十年間の『朝日新聞』の、男女ともに投書できる「声」と女性のみが投書できる「ひととき」という二つの投書欄への女性の投書に対して比較研究を行った。この問題の理解には、非常にヒント的なものなので、長いながらも、便宜的にまとめさせていただく。

#### 第一に、丁寧体により表現された内容

女性投書者は、丁寧体の使用により、「声」においては、形式上での女らしさを保ちながら、内容上では、身内への言及がそれほどでもなく、社会的な問題に対して性別を超越し人間としての意見をあくまでも訴える。それに引きかえ、「ひととき」においては、形式上での女らしさをさほど気にせず、内容上での女らしさを前面に出し、もっぱら家庭内のあれこれ、自画自賛、もしくは家庭礼賛型の内容を寄せるのである。

#### 第二に、丁寧体の使用による立場の保持

一九七〇年以降、丁寧体は、「声」の投書では、女性も依然として使用するが、男性の方も使用するようになる。それに対して、「ひととき」の投書では、その使用は「声」よりも低くなり、しかも使用の割合が減少する傾向にある。原因の一つは、「声」の読み手には男性も女性もいるゆえ、自分の意見や主張を読み手に容易には受け入れてもらうために、女性の投書者は自らの立場を改め位置付けと意味付けをしていかなければならない。が、「ひととき」の読み手も自分と同じ性別の女性であるゆえ、女性の投書者は自己表現においては、女らしさをわざわざ強調する必要はない、ということにある。

#### 第三、「主婦」というアイデンティティーに関する自己申告の変遷

「主婦」と申告した投稿者の割合は、一九七五年をピークにして徐々に減少してくる。一方、一九八〇年代になってから、「専業主婦」と申告し、「主婦」としてのレッテルをさらに補強する人が現れてきた。原因は、一九七〇年代では、「主婦」が肯定的イメージを持ち、アイデンティティーとして安心して受け入れられるものであったが、一九八〇年代に入ってから、「有職主婦」「パート主婦」等が増加した結果、「主婦」だけと申告したら、肯定的なものとして捉えられなくなった。即ち、この申告と丁寧体の使用は、「主婦」たちが、「主婦」としてのアイデンティティーを確保するとともに、社会問題を批判したり

自らの意見発表をしたりする足場を獲得するための道具である。

まとめていえば、書かれている内容は、文末によって気分のようなものも伝える。そこで、「敬体」・「常体」を使い分けるヒントは、書き手が、自分の立場をいかにとるか、と同時に、伝達内容をいかに読み手に印象深く受け入れてもらうか、どんなイメージを残そうとするのか、ということにある。

文末は「である」調、「です・ます」調、「だ」調のいずれかに決めて、混用しないようにします。一般的には「です・ます」調は丁寧で、語りかけるような柔らかい印象を与えますが、「だ」調や「である」調は客観的で言い切る印象があるので、論文やレポートでは普通後者を用います。(山本 [2014], p.19)

大学一年生の文章作法についての指導書に現れたものである。会話文ならず文章の構文なのである。なぜ「常体」ではなく「敬体」を用いるのか。原因は次にある。

「です・ます」調で書かれた文は、相手にそれとなく同調を迫り、相手を自分のペースに巻き込んで、うやむやのうちに同調させようという圧力を持つと私は思う。「です・ます」調の文に対しては批評意識が働かせにくい。(中井 [2010], p.318)

「敬体」で表現される文章は、丁寧で柔らかくて読者に読み進めやすい印象を与えるゆえに、説得効果が高い。

瀬戸内寂聴は平成の「源氏物語ブーム」の火付け役ともいえる存在である。それをたらしめるには、彼女の『現代語訳源氏物語』（講談社 1996～1998）が大きな勲を奏したものである。その原因として、「です・ます」体で読者に訴える力を強めている点も見逃せない（北村 [1999]）ことが挙げられる。という指摘は、正に「です・ます」体の力強さの裏付けである。

逆に、「常体」で表現されると、語気が強くなり、断定的で堅い印象と威圧感を人に与えるゆえ、専門的な内容や主観を書き連ねるときには、「敬体」よりも「常体」の方が勢いと説得力が増す反面、とっつきにくいばかりか嫌悪感を抱かせることもある。

したがって、「敬体」は対話的（話し掛けの）・情的・冗漫的な表現に適したもので、使用されるシーン・媒体が、企業紹介記事・文書・解説文／説明文／商品のマニュアルや説明書などである。それに引きかえ、「常体」は独語的・知的・端的な表現に適したもので、使われるシーン・媒体が、ニュース／新聞・雑誌／ゴシップ誌・体験談・個人ブログ・論

文・レポートなどである。

### 3. 2 同じく「常体」なる「だ体」・「である体」の使い分け

文章に、「だ体」・「である体」の混在がよくある。それに関して、於（[2010]）は次のようにまとめている（p.3）。

|        |   |
|--------|---|
| 「だ体」   | ①特定の人に親しく話しかけるように書くとき不特定多数者を対象に独話的に書くとき<br>②話し手の自問自答や心理活動を表すとき<br>③不特定多数者に自分の意見や判断を一方的に伝えたり、また強く働きかけたりするとき  |
| 「である体」 | ①不特定多数や一般人を対象として書くとき<br>②個人の意見や見解、または一時的な出来事や情報とは違って、客観性が高く恒常性を持つ事実を伝えたり多数者の意見や社会的常識を述べたりするとき<br>③論理関係を重んじられる科学的知識や研究結果、また法規法律や心理を述べ立てたり解説したりするとき |

日本文の弱点は語尾が単調になることで、語尾を豊かにしようと誰も苦心するはずだ。動詞でおわることを多くする。体言止めにする。時に倒置法を使う。いずれもわるくない工夫である。（中井 [2010], p.318）

とあるように、書き手の「私」は、「誰も苦心するはずだ」をもって、「不特定多数者を対象に独話的に」「自分の意見や判断」を訴えるのに対して、「いずれもわるくない工夫である」をもって、「語尾を豊かに」するための諸々の工夫を「論理関係を重んじられる科学的知識や研究結果」として伝えたり「多数者の意見や社会的常識」として述べたりするのである。

大学では、レポートや論文は常体で作成すべきだと指導される一因は、書き手が自らの気持ちを書くのではなく、不特定多数の読み手を想定して事実や意見を客観的に述べる、言い換えれば、書き手が誰であってもその価値が変わらない文章である、ということにある。

### 3. 3 同じく「常体」なる「のだ」・「のである」の使い分け

文末の「のである」・「のだ」は、「認識モダリティ」を表わすほか、「発話・伝達モダリティ」をも表している。

「のである」に関して、山本は、「小説世界に現実味を与えるための『解説』『状況』の/de— a —ru/ は語り手の今、ココを表わしたものである」（[2002], p.15）。「語り手は顕わに姿を見せつつ自己のパースペクティヴァをル形に反映させる。語り手の自己存在の主

張が意図されている。」([2004], p.5)と論究しているし、中井([2012])は、『『のである』を、私は『ここで一度立ち止まって今迄の立論を振り返れ』という印とみる。どうしてもなくてはならぬ場合以外に使用すると相手をむやみに立ち止まらせ、相手の頭にこちらの考えを押し込もうとする」(p.318)と追究している。

一方、「のだ」の場合、その「発話・伝達モダリティ」は、さらに、情報上の機能が中心となる——発話態度が命題の情報に関して強調される「情報の『だ』」と、情意交渉——発話態度が主体の発話行為に関して強調される「情意の『だ』」とに細分できる(メイナード[2002], p.128)という先行研究、それから、それを踏まえた、「のだ」は「主観的論理の『のだ』」と「情意の『のだ』」とに二分できるという論究がある。「主観的論理の『のだ』」は、「すなわち、換言すれば、やはり、だから」などによって導かれ、「事情説明、言い換え、帰結、理由付け」などのニュアンスを持つもので、話者が命題を主観的論理に従って把握しそれに対する解釈を述べるものである。「情意の『のだ』」は、「『そのような内容は本来的に聞き手は知らない情報であり、話し手も聞き手が知らないはずだと思っている』ということ伝える『内情はこうなのだ』と打ち明けるニュアンスを伴う<打ち明け表示>の機能を持つ」もので、「発話時点・発話現場での話者自身の発話の伝達態度を表わし、感情移入のマーカーとなる」、という。(神田[2001], pp.80 - 87)

お留伊は(中略)幾度も総身のふるえるような感動を覚えた(中略)しかし、それは気後れがしたのではない。楽殿の舞台上で次々に披露される鼓くらべは、まだどの一つも彼女をおそれさせるほどのものがなかった。彼女の勝ちが確実である。そして、あの暖簾の前に進んで賞を受けるのだ。遠くから姿を拝んだこともない太守の手で、一番の賞を受けるときの自分を考えると、そのほこらしさと名誉のかがやかしさに身がふるえるのであった。(山本周五郎「鼓くらべ」)

加賀藩主は、鼓くらべを行ない、優勝者に賞を授ける。十五歳になるお留伊は、見事入賞の栄誉を我が物にしようとする激しい意欲を燃やし、出番を待っている、というシーンである。

その読解方法の拠り所に関して第Ⅳの部分でさらに補説していくが、書き手は、「気後れがしたのではない」で、語り手の今、ココを強調しその姿を露わにし、「身がふるえるのであった」で、作品世界の事象を事実としてコード化し強調している。そうすることにより、書き手は、語り手のパースペクティブで事象の成立を捉え、お留伊のその場での一挙一動を見事に描き、「客観性が高く恒常性を持つ事実を伝えたり多数者の意見や社会的

常識を述べたり」し、「相手の頭にこちらの考えを押し込もうとする」のである。それに対して、「賞を受けるのだ」で、「発話時点・発話現場での話者自身の発話の伝達態度を表わし、感情移入のマーカーとなる」「のだ」を用い、読み手が「知らないはず」の「内情」を「打ち明け表示」し、登場人物のパースペクティブで事象の成立を捉えることを通して読み手を登場人物に自己同化させることに成功し、お留伊のかくも強い意欲を生き生きと描いている。

#### IV 時制による伝達意図

小説は、基本的に作者が過去の出来事を取り扱う形で構成・創作されたものである。この意味で、このジャンルの作品は過去形のもので、すべて過去表現を使用してもおかしくないであろうし、現に過去形が多用されている。

しかし、語尾や文末辞の変化により時制の変化を示すやり方がない中国語の母語話者にとっては、下記のことを理解しにくくて、作品の読解の妨げになる。それは、日本語の作品において、「過去形」・「現在形」が混在することはむしろ多い、それから、同じ状況・出来事を伝えるには「過去形」・「現在形」が転換可能な場合が多い、ということである。

中国語母語話者に、作品の読解について指導をするとき、書き手の伝達意図を手掛かりにして、「過去形」の由来やその特異性に基づき、「過去形」・「現在形」が果たした時制以外の機能とその使い分け法、それから達成された効果を説明していったほうがよいだろう。

##### 4.1 人称をほのめかす機能

中国語や英語の小説における過去形は、何らかの方法で、出来事の発生ないしは状態の完了を明確的に示すものである。しかし、日本語の小説における、「近代」に入ってから「制覇をなし遂げた」「過去時制」(藤井 [2010], p.190)、言い換えれば「この散文小説の<過去>形式は、文法上の過去形とは異質で、小説言語の特性の一つで」、「読者にその本文が散文小説というジャンルに所属していることを指示する装置の一つとして働くことテキストになっているのであって、<虚構>を支える機能」(三谷 [1984], p.47)なのである。

具体的に言えば、「文末詞『た』は日本語文法のカテゴリ組織上もっぱら時制詞として取り扱われてきた。だが実際にはこれは人称詞なのであり、「近代日本が発見した新しい『三人称』を表示する文末詞なのである」(野口 [1994], p.225, 264)とあるように、動作の行い手は「三人称」である場合もあれば、「『彼は、念のためにと数えてみた』(中略)この表現が日常言語では一人称にのみ可能であることが示唆するごとく、小説言語では三

人称が同時に一人称的な機能を果たしている」(三谷 [1984], p. 47) 場合もある。

#### 4.2 文脈により果たした意味機能

時制とは主観的なもの、いわば人々の時間に対する感覚であり、客観的時間とは異なる概念である。日本語には、現在・過去・未来といった厳密な時制が存在せず、同じ時制だが、文脈によって様々な意味機能を呈するのである。

「現在形」の場合、「僕は小説を書きます」のように習慣・職業・性質・一般的事実を、「よし、僕も小説を書きます」のように今現在の意志を、「はいはい、小説を書きますよ、必ず!」のように未来へ向けての決心を、「あの苦しい時代に、僕らは小説を書く」のように感慨深く過去のことを、それから、「するだろう」のように未来への確率の高い推測を、「いまにも～しそうだ」のように確実な予測を、「するつもりである」のように現時点の決断を、「することになっている」のように「決断+確定」を、「する予定である」のように個人の予定としての「確定+準備」を、それから、「ている」形だが、「赤ん坊が泣いている」や「金魚が死んでいる」のように「既存の結果が現在存在している」ことを、「父はこの頃六時に起きている」のように「現在の習慣」を、「アフリカでは、毎日数万の人が食糧不足のために死んでいる」のように「集団としての現象の継続」を、「犯人が捜査当局に挑戦していることがはっきりした。読売新聞社への電話は犯人から四回かかっている」のように「現在に意義を持つ過去の事象」を、「あの人はずいぶんふとっているね」のように「形容詞的動詞」の使用で状態・性質を、というふうには、様々なものを表わすことができる(寺村 [1984], pp.123-146)。

一方、「過去形」の場合、「昨日日本に着いた」のように単純に過去を、「やっと日本に着いたぞ」のように現在完了を、「日本に着いたら、連絡してください」のように未来を、「ああ、バス来たよ!」のようにバスが入ってくる光景を指す「現在進行形」を表わすことができる。殊に、おなじ「過去形」だが、文中と文末とで位相が異なり、連体修飾節の「た」のように過去を表示する代わりに性質や状態を示すものが特筆すべきであろう。その原因は次のように、古典日本語の「たり」と近代以来の日本語の「た」との関係から追究されている。

助動詞「たり」から現代語の「た」ができたことは(中略)「たり」は /te + ari/ と分析されて、完了の助動詞「つ」の連用形に、存在詞の「あり」がついた形と考えられる。その意味は、「完了した動作・作用(つ)の主体が存在する(あり)」ということだろう。／それならば、ここでも発話時点で意味をもっているのは、「あり」

という言葉で示される、動作・作用を完了した主体だ。従って、現代語の「た」は、本来、西欧語のような過去を過去として指示する機能をもつものではないということになる。(熊倉 [1990], pp.47-48)

こんなに時制観念のもとで、同じ出来事を小説で違った時制で表現すると、当然として異なったイメージを読み手に与える。例えば、「西瓜の皮に躓いて転んだ」は、西瓜の皮で滑って地面に転がっているシーンを読み手に強調的に見せ示すのに対し、「西瓜の皮に躓いて転ぶ」は、歩いていて西瓜の皮を踏んで転ぶその瞬間がイメージされる。

濁流は、メロスの叫びをせせら笑うごとく、ますます激しくおどりくるう。波は波をのみ、巻き、あおり立て、そうして時は、刻一刻と消えていく。今はメロスも覚悟した。泳ぎきるよりほかにない。(太宰治「走れメロス」)

正義感あふれる牧人のメロスは、暴虐な王を殺そうとするが、逮捕され死刑の判決を受けてしまう。妹の結婚式のため、三日間の期限をもらい、その後必ず戻ると王に約束しようとするが、王には信じてもらえない。そこで彼は親友のセリヌンティウスを人質とする。妹の結婚式を挙げてから、メロスは王城に向かって出発するが、暴虐な山賊や氾濫した川、灼熱の太陽が彼の行く手を阻む。一度は力尽きてしまうメロスだったが、純真一途な精神に満ちて困難を乗り越え、最後の力を振り絞り刑場に突入し、友を救いあげることに成功する。過去のことだが、「語り手は、それらの事象小説世界の事実ではなく、/ -ta/ で事実化された事象をより一層読み手に理解させようと、その周辺の事柄を解説したり状況を描いたりしたことを、グラウンドである自分の立脚時点の表示マーカーの / -ru/ で明示する」(山本 [2002], p.15) ののである。言い方こそ違うが、それは、歴史的現在形による劇的効果、あるいはその場面にいる登場人物の視点から描いた臨場感を狙うため、作者が意図的に選択したものだという指摘(サイデンステッカー・安西 [1983])も当てはまる。

#### 4.3 書き手のパースペクティブの捉え方を提示する機能

語り手は作中人物の出来事を語ることを特徴とする近代以来の小説には、語り手・作中人物、そして語り手の視点・作中人物の視点、というふうに、二重の存在が二つある。書き手は、「事象の成立を、語り手のパースペクティブで捉えたとするか、作中人物のパースペクティブでとらえたとするか」(山本 [2004], p. 3) によって、表現効果が違う。

山本 ([2004]) は、「パースペクティブ操作」という観点から、タ形・ル形に反映さ

れる書き手のパースペクティブの転換を、次のように指摘している。(pp. 3-7)

第一に、書き手が語り手のパースペクティブで事象の成立を捉える方法

タ形をもって事態を小説世界の事実として提示する方法と、ル形をもって文中において「顔出し」をする方法とがある。前者は、出来事が出来事を引き起こす因果などの必然的な帰結関係を示すタ形の連鎖を成す各タ形の機能は、事態を小説世界の事実としてコード化することで、後者は、ル形をもって虚構世界を読み手に十分に理解させるために施した説明である。

第二に、書き手が作中人物のパースペクティブから表わす事態

その事態には、作中人物の思考内容（考えたこと、判断したこと）と知覚内容とがある。ル形をもって表現された上記の二つの事態は、読み手には、作中人物の心内を見せたり、作中人物の視点で小説世界の種々の事象を見せたりすることを通じ、読み手を作品世界へ誘い入れる。

中でも、中国語母語の日本語学習者に指導するにあたり、要注意するところがある。それは、作中人物の知覚内容を示す「ている」・「ていた」の指示機能である。

「ている」により示された内容に関しては、山本 [2002] は、書き手は、それにより作中人物のパースペクティブで事象の成立を捉えるとしている。そのうえで、その表現の効果について、「テイル形式の意味機能は、話者が、自己の位置するグラウンドと同位置にある事象の一つを取り立てて指示し、その事象の成立を自己の今ココで認識するという『同位置』認識スキーマの実現を反映するものであ」(山本 [2005], p.99) としている。つまり、書き手は、さながら自分自身がある場にいるという臨場感を溢れんばかりに漂わせたうえで、作中人物のパースペクティブで事象を捉え、読み手に「同位置」即ち自己同化の効果を求め、伝達しようとする内容を生き生きと浮彫にするという視覚にでも訴える手段で、読み手の頭に焼き付けることに極めて効果的なのである。

それから、「ていた」により示された内容に関しては、山本 [2002] は、その内容には「事象を事実としてコード化する語り手のパースペクティブが重ねられることになり、その事態は作中人物の知覚内容であると同時に世界の事実となり、それ以降の事態を引き起こすエネルギーを持つことになる。」(p. 8) と分析している。

このように、語り手は、「現在形」・「過去形」を巧みに駆使した結果、「日本語で書かれた物語の時間は、欧米の文学のように、過去の物語として過去時制によって統一されるのではなく、テレビや映画に流れる時間のように、目の前に実在するように描かれ」(熊倉 [1990], p. 40)、優れた小説は、その言語的特性に由来する緊張感・臨場感・現前性を漲らせ、正にテレビや映画のシーンを形成させた観を呈するのである。

## V 文体学的アプローチから作品読解への試み

以下の例をもって、上述した各角度からのアプローチを試みてみようとする。

ふと耳に、潺<sup>せんせん</sup>々、水の流れる音が聞えた。そっと頭をもたげ、息を吞んで耳をすました。すぐ足もとで、水が流れているらしい。よろよろ起き上って、見ると、岩の裂目から滾<sup>こんこん</sup>々と、何か小さく囁<sup>ささや</sup>きながら清水が湧き出ているのである。その泉に吸い込まれるようにメロスは身をかがめた。水を両手で掬<sup>すく</sup>って、一くち飲んだ。ほうと長い溜息が出て、夢から覚めたような気がした。歩ける。行こう。肉体の疲労<sup>かいはく</sup>回復と共に、わずかながら希望が生れた。義務遂行の希望である。わが身を殺して、名誉を守る希望である。斜陽は赤い光を、樹々の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている。日没までには、まだ間がある。私を、待っている人があるのだ。少しも疑わず、静かに期待してくれている人があるのだ。私は、信じられている。私の命なぞは、問題ではない。死んでお詫び、などと気のいい事は言って居られぬ。私は、信頼に報いなければならぬ。いまはただその一事だ。走れ！ メロス。(太宰治「走れメロス」)

### 第一に、漢語語彙の使用

戦争中、弱くても頑張って生き抜こうとする人間のあるべき姿勢、そして戦い続ける姿を訴え、人間性への賛美、よりよい未来への期待を平凡で弱い立場にいる民間人に伝えるために創作したこの小説には、漢語語彙が多用されている。これらの漢語語彙は、物語っている内容の高尚さ・貴さにつながる。

### 第二に、完結文の「過去形」文末辞

「聞こえた」・「すました」・「かがめた」・「飲んだ」・「した」「生まれた」など、いずれも、過去の出来事について、語り手が語った三人称のメロスの動作である。換言すれば、この部分は、書き手が、夕形を利用して語り手のパースペクティブで事態を小説世界の事実としてコード化したものである。

### 第三に、完結文の「現在形」文末辞

「日没までには、まだ間がある(中略)メロス」は、三人称の作中人物のメロスの「思考内容」で、「歩ける。行こう」と「走れ！ メロス」は彼の決意を、「私の命なぞは、問題ではない。死んでお詫び、などと気のいい事は言って居られぬ。私は、信頼に報いなけ

ればならぬ」は、その決意の強さを示している。

「水が流れている」、「清水が湧き出ている」、「葉も枝も燃えるばかりに輝いている」などに記述された事象は、語り手が、メロスのパースペクティブで描出された彼の「知覚内容」である。もっとも、ここにおいて、書き手のパースペクティブの捉え方は、あからさまな「知覚スペース導入メーカー」こそないが、文脈によって示されている。

第四に、「顔出し」の形で文中に現れる「現在形」

「水の流れる」、「名誉を守る」により、書き手は、当時のメロスの心情という虚構世界を読者に十分に理解させるために、語り手のパースペクティブから施した解説である。肉体の疲労が回復したメロスは、「夢から覚めたような気がし」、このような環境に気づいたわけである。それは、「わずかながら希望が生れた」ことに関わっている。

第五に、「だ」・「である」の使い分け

書き手は、「義務遂行の希望である。わが身を殺して、名誉を守る希望である」で、その希望の貴さを「恒常性を持つ事実」や「多数者の意見や社会的常識」として読み手に訴えている。それに対して、「いまはただその一事だ」は、前に出た「待っている人があるのだ。少しも疑わず、静かに期待してくれている人があるのだ」に呼応してメロスの「自問自答や心理活動」を語り、その内心の格闘がいかに激しいかを生き生きとして読み手に伝えている。

第六に、「のだ」・「のである」の使い分け

書き手は、「待っている人があるのだ。少しも疑わず、静かに期待してくれている人があるのだ」で、メロスのパースペクティブで<打ち明け表示>の機能を果たし、自分自身の発話の伝達態度を表わすことを通し、読者に感情移入させる効果を取める。

それから、「清水が湧き出ているのである」は、書き手は、メロスのパースペクティブを捉え周辺の環境を見ることを通して、メロスの心情を如実に読者に伝えることにより、読み手に自己同化の効果を求め、作品全体に明るいイメージを与えることになる。

このように、「作品が最大の効果をもって読み手に伝わるような種々の言語装置」(山本 [2002], p. 2) を駆使した書き手の太宰治は、人間同士の相互信頼と友情の貴さをクローズ・アップし、戦中・戦後の混乱した生活を強いられていた読者に大きな感動を与え、弱い、しかし美しい真実の人間に勇気をつけたことに成功したのである。

## おわりに

自らの伝達意図を読み手に、なるべく完璧に伝え最善の表現効果を取めるために、書き

手はいろいろなストラテジーを用いることができる。作品に上品さ・厳かさを漲らせるために名詞をはじめとする実質的意味のある漢語名詞や漢語動詞を必要に応じて使用したり、根拠や基準の曖昧な認識や誇張感を孕ませ諷刺などの効果を達するために文法的働きをなす漢語副詞を使用したり、自らの立場と意見発表の足場を確保するために「敬体」・「常体」の使い分けをしたり、作品に緊張感・臨場感・現前性を満たさせ生き生きとした効果を収めるために書き手が自らのパースペクティブと視点の転換を行ったり、ということがよく挙げられる。日本語を勉強する中国語母語の者は、漢字知識・中国文化知識のお陰で実質的な意味のある漢語品詞の使用によった効果を読解できるが、反面、その影響のせいで漢語副詞が帯びたニュアンスはよく読破できないのである。が、より大きな問題は、中国語にないがゆえに、その語尾や文末辞の変化による「常体」・「敬体」、「現在形」・「過去形」の使い分けを通して書き手が実現した意図伝達への理解であろう。

## 参考文献

- 石黒 圭 [2004] (p. 217) 「中国語母語話者の作文に見られる漢語副詞の使い方の特徴」 『一橋大学留学生センター紀要』 第7号, pp. 3-13
- 泉子・K・メイナード (p. 221) [2002] 『情意の言語学』 くろしお出版
- 上田 修 [2006] 「これからの文体論」 『福岡女学院大学紀要』 第16号, pp. 25-46
- エドワード・G. サイデンステッカー、安西徹雄著 [1983] 『日本文の翻訳』 大修館書店
- 岡部匠一 [1969] 「文体特性の区分」 『信州大人文学論集』 第4号, pp. 45-50
- 岡本能里子 [1997] 「教室談話における文体シフトの指標的機能—丁寧体と普通体の使い分け—」 『日本語学』 第16巻第3号, pp. 39-51.
- 神田靖子 [2001] 「語用論的機能から見た二つの『だ』」 『同志社大学留学生別科紀要』 第1号, pp. 71-90
- 北村結花 [1999] 「いまどきの『源氏物語』—円地文子訳から瀬戸内寂聴訳へ—」 『国際文化学』 創刊号, pp. 175-186
- 熊谷滋子 [1996] 「女の文体の移り変わり：過去40年間の新聞投書をめぐって」 『人文論集』 第47巻第1号, pp. 263-275
- 熊倉千之 [1990] 『日本人の表現力と個性』 中央公論社
- 小池清治・鈴木啓子・松井貴子 [2005] 『シリーズ〈日本語探求法〉6 文体探求法』 朝倉書店
- 小林秀夫 [1975] 『文体論の建設』 みすず書房  
[1976] 『文体論論考』 みすず書房

- 佐藤 孝 [1966] 「文体について」『日本文学誌要』16, pp. 97-105
- 篠沢秀夫 [1998] 『文体学の基礎』新曜社
- 高橋美奈子 [2014] 「大学生の文体混用についての一考察——『仏教』レポートの分析——」『四天王寺大学紀要』第58号, pp. 481-492
- 寺村秀夫 [1984] 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- バリー・カヴァーナ ([2010]) 「普通体と丁寧体の使用法についての考察」『青森保健大雑誌』第11巻, pp. 87-92
- 中井久夫 [2010] 『記憶の肖像』みすず書房
- 西村綾夏 [2017] 「文体における視覚的文体素の役割」『言語科学論集』第23巻, pp. 19-38
- 野口武彦 [1994] 『三人称の発見まで』筑摩書房
- 野田尚史 [1998] 「『ていねいさ』からみた文書・談話の構造」『国語学』第194集, pp. 102-89
- 能登恵一 [2012] 「文体論雑感」『欧米言語文化論集』, pp. 33-45
- 野村明等編 [2005] 『表現と文体』明治書院
- 野村真木夫 [1996] 「文章・文体」『日本語学』第15巻第8号, pp. 79-85
- ピエール・ギロー著、佐藤信夫訳 [1987] 『文体論：ことばのスタイル』白水社
- 藤井貞和 [2010] 『日本語と時間』岩波書店
- 深澤恒男 [1996] 「体験話法の過去形から見た物語の過去形の性質と問題点」『人文科学論集』第30号, pp. 43-53
- ミカエル・リファテール著、福井芳男（ほか）訳 [1978] 『文体論序説』朝日出版社
- 三谷邦明 [1984] 「近代小説の言説・序章：小説の<時間>と雅文体あるいは亀井秀雄『感性の変革』を読む」『日本文学』第33巻第7号, pp. 47-56
- 守屋三千代 [1992] 「小説の中の視点と文法：時制と相を中心に」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』第4巻, pp. 98-120
- 山梨正明 [1995] 『認知文法論』ひつじ書房
- 山本幸司 [2014] 『大学一年生の文章作法』岩波書店
- 山本雅子 [2002] 「小説文末辞/-ta// -ru/ の意味-認知的観点から」『言語と文化』第7号, pp. 1-21
- [2004] 「語りのパースペクティブ」『言語と文化』第11号, pp. 1-15
- [2005] 「テイル形式の認知的意味」『言語と文化』第13号, pp. 89-101
- 劉金拳・姚丹 [2019] 「テキストにおける表記法の役割及びその重要性について」『札幌大学総合研究』第11号, pp. 83-99
- 劉金拳・王宗傑 [2019] 「文学文体学に基づいた『夢を建てる人々』の鑑賞」『日本言語文化研究』創刊号, pp. 30-40
- 魏育隣 [2002] 『日語文体学』吉林教育出版社
- 於日平 [2010] 「日語文章内容的陳述方式和不同文体使用的關係」『日語學習与研究』第6期, pp. 1-9
- 開拓社『言語学から文学作品を見る—ヘミングウェイの文体に迫る』<http://kaitakusha.co.jp/book/book.p.hp.?c=1828>（最終アクセス日は、2020.1.16である）
- 日本文体論学会「日本文体論学会について」<http://www.p.enta.ge.cst.nihon-u.ac.jp/~tyanagi/buntai/>（最終アクセス日は、2020.1.16である）

（本稿は、広東外語外貿大学外国文学文化研究センター客員研究助成金と浙江越秀外国語学院日本文学研究助成金の成果の一部である）